

「一つになる」

ヨハネの福音書 17 : 21 - 23

April.5.2020

### ヨハネの福音書 17 : 21 - 23 (パウロ)

#### Preface

主イエス様が、私たち人類の罪のために、十字架に架かれた受難を覚える受難週を迎えました。

そこで今朝は、イエス様が十字架の受難をお受けになる前に、ゲッセマネという場所で祈られた祈りから、神の恵みを分かち合いたいと思っています。

イエス様が十字架に架けられる前に、血のような汗を滴らせながら父なる神に祈った内容が、ヨハネの福音書 17 章全体に記録されていますが、先ほど読んだ聖書箇所、イエス様は、しきりに「一つにしてください。」と祈っております。

「一つにしてください」と、血のような汗を滴らせるほどに、熱心に祈っておられます。

なぜなら、人類が、人が抱える問題の根本が、「一つになれない」ことから生じ、そのものずばり「一つになれない」からです。

#### Part One

元々、人は「神と一つになる存在」として造られました。創世記に行ってみましょう。

### 創世記 1 : 27、2 : 7 (パウロ)

天地万物を創造された神様は、最後に人を創造されました。

そして、どの動物にも、どの植物にも、どの森羅万象にもしなかつたことを人にされました。

それは、いのちの息を吹き込むことでした。

この「いのちの息を吹き込む」と訳されている言葉は、「神の霊を吹き込んだ」とも訳すことができます。

神のかたちとして創造された人にも、神は、神の霊を吹き込んだのです。

そして、神の霊を吹き込まれた人は、それで、初めて生きるものとなりました。

つまり、人は、元来、神と一つとなって生きる者として造られたということです。

人は、神無くして、生きることが出来ない者であるということです。

それなのに、神の命に背くという、自分で自分の存在を否定するかのような究極の愚行である罪を犯した人（最初に人間アダム）は、もうこれ以上、「神と一つとなる」という、本来あるべき生を生きることが出来なくなってしまいました。

そして、全人類は、自然の状態のままでは、神と一つとなって生きるという生き方が、出来なくなってしまいました。

### 創世記 6 : 3 (パワポ)

と書いてある通り、神の霊が私たち人間から離れて、本来あるべき生を、生きられなくなりました。

そればかりか、神と一つとなるということを放棄してしまった私たち人間は、神と葛藤関係に入りました。 もっと言うと、敵対関係に陥ってしまうんです。

### ローマ人への手紙 5 : 10 (パワポ) (神と) 敵であった私たち

とある通りですね。

## Part Two

人の本来あるべき姿である、「神と一つである」ということを失ってしまった人は、人と人との関係においても、一つとなることが出来なくなってしまいました。

一つになるどころか、これまた葛藤関係に陥り、敵対関係に陥り、競争相手となり、打ち負かす対象となり、間違いと愚かさを指摘し合う関係に陥り、傷つけ合う関係に陥ってしまいました。

それが、どの人間関係にまで及び、浸透したかと言いますと、「ふたりは一体である」と言われた、一等最初の間人間関係であり、人間関係の中で最も親密で、最も近く、すべての組織の最小単位である夫婦関係にまで及んでしまいました。

そのため、ひとりの男とひとりの女が、夫婦となることは、一つになるという恵みの象徴ではなく、分裂の象徴となってしまいました。

### 創世記 2 : 18 - 24 (パワポ)

という風に、男と女は、まさに一つなる者として神様に創造されました。女であるエバは、男アダムのあばら骨で造られ、物理的・肉体的には、エバはアダムにとって体の一部であり、エバにとっても、

アダムは自分自身です。

精神的、靈的には、互いが互いをいたわり合いながら、協力しながら、配慮しながら、愛し合いながら生きる助け手です。

なのに、善悪の知識の木から食べてはならないし、食べたら神の霊が離れ、永遠の死を招くことになるという、神の絶対的な命に背いて、罪を犯した男（アダム）と女（エバ）は、神と一つになるということを失っただけでなく、「ふたりは一体となる」という人間関係の最も根本である恵みの夫婦関係までも壊れ、責任をなすりつけ合い、責め立て、力でねじ伏せ、ねじ伏せられる関係に陥ってしまいました。

### 創世記 3 : 8 - 13 (パワポ)

神の命に背き神を裏切ったアダムとエバは、神を避ける者となったばかりでなく、互いに罪をなすりつけ合い、責め立て合う関係になってしまいました。

アダムは「この女のせいで、私が恥をかいたんです！ この女こそ、罪の元凶です！」と訴え、肉体的な弱者であったエバは、アダムの怒る姿に暴力的な恐怖を覚えたのか、言い返すことも出来ずに、致し方ないように蛇に責任をなすり付けます。

アダムとエバの関係は、もうこれ以上、一心同体ではなく、分裂し、責め立て、なすりつけ合い、物理的・肉体的従属関係に怯え、支配し、支配される関係へと陥ってしまいました。

この関係は、創世記 4 章に入りますと、アダムとエバという夫婦関係にだけにとどまらず、生まれてきた子供にまで及び、長男カインが、次男のアベルを嫉妬と競争心に掻き立てられて、殺害してしまうという、親として想像したくもない、絶句するしかない破壊の関係をもたらしました。

そして、そこに連なるすべての人間関係は、一つになることよりも、分裂して、責め合い、人よりも抜きん出ることと専心し、

やむを得ない利害関係のためならば一つになるけれども、利よりも害が多いと感じれば、いつでもまた分裂するということを繰り返しながら、人は歴史を刻むしかなくなっていました。

このような状態を、

### 創世記 6 : 5 (パワポ)

と、聖書は記しています。

つまり、悪の最も端的な症状として現れるのが、関係破壊です。

### Part Three

私には、奥さんが1人いますが、その奥さんとの結婚を決めた時、人生を通して、精神的にも、肉体的にも、物理的にも、信仰的にも、奥さんと一つになれることを期待して、楽しみで、喜ばしくて仕方ありませんでした。

特に結婚式でする誓約の言葉には、感動を覚えました。

「あなたは今、この女子と結婚し、妻としようとしています。あなたは、この結婚が神の御旨によるものであることを確信しますか。

あなたは、神の教えに従って、夫としての分を果たし、常に妻を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健康の時も、病いの時も、富める時も、貧しき時も、いのちの日の限りあなたの妻に対して堅く節操を守ることを約束いたしますか。」

「はい、神と人との前で約束いたします。」

この誓約をした時、負担で心が縮こまってしまうようなことは一切なく、逆に、すがすがしい高揚感が心を覆い、心地の良い緊張感と決心と共に、涙がこみ上げてきました。

そして、無事、結婚式と披露宴が終わって安堵とうれしさに包まれながら、新婚旅行のため空港に向かうタクシーの中で、早速ケンカです…

ケンカの原因は、全部僕が悪いんですよ。でも、そんなこと、絶対に認められません。

美しい新婦をこれでもかと言うほどに責め立てます。

「なんで、僕の気持ちを理解して、くみ取ってくれないんだ！こんな結婚生活のスタートじゃ、先が思いやられるよ！」なんて言いながらです…

その後も、結婚生活をしていく中で、**自分の力では到底一つとなれないこと**を、まざまざと見せつけられていきます。

愛の結晶であるはずの子どもの誕生が、二人を一つにしてくれることもありますが、子どもを真ん中にして、真っ二つに割れて、「夫である俺がいてこそその子どもだろ！」なんてのたまいながら、勢い余った時には、子どもに「お父さんと、お母さん、どっちを選ぶんだ！」なんて言う捨て台詞まで発して、

マグマのように湧き上がってくる怒りに身を任せ、自分をとことん正当化します。でもその後には、悲しみとわびしさと申し訳なさが、こみ上げてきます。

世の中を見るまでもなく、もう十二分に、家庭内でも、「一つになれないこと」を実体験します。

このように、人は、(神の前に) 罪を犯した結果、神と一つになることが出来なくなり、他者と一つになることが出来なくなり、さらに屈折した劣等感によって、自分の存在でさえも認めることが出来ず、自分という存在においても、一つとなることが出来なくなっていました。

そして、ありとあらゆる関係において、葛藤と分裂を生んでしまうんですね。

そして、その葛藤と分裂を、さらに広げ、さらに深め、さらに深刻にする働きに躍起になっているのが、サタンとか悪魔とかいう存在です。

だから、イエス様は、これから十字架に架かりに行く切迫した場面で、「一つにならしめてください」と、血の汗を滴らせながら祈るのです。

なぜならば、一つになることこそ、救いだからです。

#### Part Four

人は、神と一つになることを失い、人と一つになることを失い、自分と一つになることを失って、あてもなくさまよい歩く放浪者となってしまったために、神と一つになり、人と一つになり、自分と一つになるという回復が、イエス様の与えてくださる救いになるのです。

神と一つになることを、聖書は、イエスキリストによる神との和解だと表現します。

つまり、神との壊れた関係が修復し、回復するのです。

#### ローマ人への手紙 5 : 10 - 11 (パウロ)

じゃあ、この神との壊れた関係が修復し、回復し、和解して、神と再び一つになったということ、何をもって、確証づけてくれるのでしょうか？

神の霊が、キリストの霊が、聖霊が臨むことをもって、再び一つになったことを確証づけてくれるのです。

先ほど、創世記 6 : 3 で「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。」と、神に宣言されてしまいましたが、再び、神の霊が人のうちに留まる事件が起こります。

それが、使徒の働きのペンテコステでの聖霊降臨です。

イエス様が天に上られてから 10 日間、120 人ほどの弟子たちが一つのところに集まって、心を一つにして祈っていましたが、イエス様の約束通り、聖霊が臨んでくださいました。

**使徒の働き 1 : 14 - 15**  
**2 : 1 - 4 (パウロ)**

使徒の働き 1 章から 2 章にかけて、何度も出てくる言葉があります。  
それは、「一つ」という言葉です。

弟子たちが、一つ所に集まり、心を一つにして、一つになって祈っていましたが、聖霊が臨んでくださいました。

「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない」という言葉を、神様自ら覆し、再び、神の霊を注いでくださって、神と人が一つになる、創世記 2 : 7 の神の霊を吹き込まれて神と一つとなる状態を回復させてくださるんです。

そして、神との関係を回復させられた人々は、人との関係も新たに回復させられ、自分との関係も新たに回復させられました。

**使徒の働き 2 : 40 - 47**

聖霊の臨んだペテロによって語られた聖書の言葉を通して、3000 人ものが、神の霊が自分に臨む体験を通して、再び神と一つとなり、キリスト者となりました。

そして、彼らキリスト者は、自分の存在が感謝に思え、自分とも一つになる回復を体験し、人とも一つになり、心を一つにして、一つとされた恵みを喜び、大いに楽しみました。

創世記で、破棄された一つになることが、使徒の働きで、神の霊を人に臨ませることをもって、回復するんです。

神と一つになることを破棄した人間が、どんなに頑張っても、人間の力で神と再び一つになることは出来ません。

なぜなら、人間自ら、神と一つになるという特権を放棄し、神との関係が断絶してしまったのは、100% 人間側の責任だからです。

だから放棄した特権は、人の力でまた引き戻すことは出来ないんです。

でも、神様はその状態を良しとはされずに、本来ならばへりくだる必要など全くないにもかかわらず、神様側からへりくだり、神様側から、今一度、手を差し伸べ、一つになる祝福を与え、その回復と和解を成してくださいました。

それが、主イエス様が十字架に架けられた理由であり、救いです。

私たち人間が、神と一つになり、人と一つになり、自分と一つになる方法は、主イエス様の十字架の贖いの恵みを受け、その十字架に架かられたイエス様を見上げることでしか成就しません。

## Part Five

### ピリピ人への手紙 2 : 1 - 8 (パウロ)

ピリピ教会は、イエス・キリストにある、一つになる恵みを受容した信仰者の群れでありましたが、クリスチャン同士何かしらの葛藤、争い、分裂分派のようなものがあつたようです。

人は、救われてもなお、罪人としての性分が残っていますから、利己心や競争心や嫉妬に駆られて、ケンカや争いや葛藤を引き起こしてしまいます。

そんなピリピ教会の人々に向けて、使徒パウロは、「同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして」欲しいと嘆願します。

でも、パウロが求めるように、一つになることは、人間の努力や志しでは、出来ません。

イエス様がなしてくださった十字架の受難を覚えて、先週の石田先生のメッセージにもあつたように神の前に負けを認め、心を砕き、へりくだって、正当化を止め、自分の過ちを認め、利己的な思いを捨てなければなりません。

イエス様は、ご自分が神であられるのに、神であられることを捨てられないとは思わずに、神であられることをお捨てになり、十字架の死にまで従われて、頑固で、意固地な人と、和解し、再び一つとなつて下さいました。

これを覚え、覚えたことを実行に移すならば、また再び一つになれるということです。

### ピリピ 2 : 3 - 5 (パウロ)

これを一言でいえば、「ごめんね。」と、こちらが先に伝えることです。口先だけの「ごめんね」は、相手もすぐに気づきます。

「ごめんね」という言葉が心の奥底から湧き上がってくるまで、イエス様と対話を交わして、イエス様自ら示してくださった十字架の贖いに倣って、自分を神の前と人の前でポキッと折って、ごめんねと伝えたいと思うまで、イエス様の十字架のわざを心に刻むのです。

そうすれば、神に導かれた「ごめんね」が出てきます。

## Part Six

先ほど、我が家の夫婦関係、家族関係について話しましたが、やっぱり、イエス様抜きには、一つになれません。

エペソ書を見ますと、夫婦関係、親子関係を、キリストと教会の関係になぞらえて書いていますが、結局それも、「ごめんね」と、心を込めて相手に伝えることから始まるんです。

### エペソ人への手紙 5 : 21 - 28、32 - 33、6 : 1 - 4 (パウロ)

要するに、イエス様が命を懸けてなしてくださった救いの業を深く深く心に覚えるならば、関係を壊そうとする思いや行いが、まず自分の内にあることを認めるように導かれて、間違いを素直に認めて、「ごめんね」と心底言いたくなるということです。

私たち夫婦、私たち6人家庭は、イエス様無くして、全くもって成り立ちません。

イエス様がいらっしゃらなければ、いつまでも、どこまでも、自分の主張ばかりを正当化し、また正当化し、本当にそれが正しいと心底思い、どこまで行っても平行線で、まかり間違ってもその平行線がぶつかって火花が散って、その火花が家具に引火し、家を燃やし、家族を燃やし、家庭を燃やし、家族の関係が崩壊して終わりです。

そんな危機的状況を、何度も、何度も、一つにならしめるために、十字架にまでかかって死んでくださったイエス様が、取り持ってくださいました。

牧師になって、本当に良かったなあと思うことがあります。

それは、夫婦喧嘩後の怒りを、3日以上持ち続けることが出来ないということです。

なぜなら、説教を準備して、説教をしなければならぬからです。

私は、主日礼拝のための説教準備に、1日8時間みっちりやったとしても、最低でも3日かかってしまいます。普通は4日、長いと5日かかってしまいます。

その間、聖書の言葉と格闘しながら、うめくような祈りをするわけですが、祈りのうちに、奥さんに対する怒りをずっと指摘され続けて、説教原稿を作成しようにも、一言も出て来ないんです。

で、祈るんです。「イエス様、今回だけは、僕は全く、全然悪くありません。

奴が100%悪いですし、頑固で、偏屈で、理解の出来ない馬鹿なんです。僕は悪くありません。だから、説教準備させてください！」って、祈るんです。

でも、答えはいつも同じです。「あなたが悪いし、あなたが頑固で、あなたが偏屈で、あなたが理解の出来ない馬鹿なんだよ〜。」

もう、「ごめんね。」と言って、仲直りするしかないですよ。

子どもたちにもそうです。子どもたちにも「ごめんね。」と言うんですが、最近娘に、「謝ったって、どうせまた怒るんでしょ！ いつも口ばかりなんだから！」と、なじられます。

それでも、「ごめんね」と、謝るしかありません。だって、説教準備が出来ないんですから。

イエス様のことを深く深く覚えることが、一つになる、仲良くする唯一の秘訣です。

## Conclusion

結論です。

イエス・キリストの受難を、センチメンタルに解釈し、自分勝手に感謝して、自分の傷を自分で上手く舐めるために利用して、自己満足的な信仰に陥って、終わるのではなく、

今、「ごめんね」と伝えなければならない人に、「ごめんね」と伝えることをもって、キリストの受難を身に、心に刻みたいと思うのです。

キリストの受難を覚えるこの時こそ、改めて、新たに、神と一つになり、人と一つになり、自分と一つになる祝福を味わっていきましょう。

そして、この礼拝堂で、またオンラインで礼拝をささげているすべての人が、物理的限界を超えて、キリストにあって一つとされていることを感謝しつつ、一つになる喜びを、人生や暮らしの現場で体現していけるよう導いてくださる神様に期待しましょう。

お祈りしましょう。

祝祷：ヨハネの福音書17：21a